



ついでに梅

全岸撰

中村俊定文庫
文庫 18
324



無常集
巻之

神風鶴のあふしとてさうに
七年のねるをとおひし
白くはらその又りりと思ふよ今
青は雨のききとあそぶ多めの花も
花んや柳と春の梅をふく
主のまうへし
無常集百意集の独壇
かきとせんといふ

宝曆四甲戌春二月

金海
無常



ウ

葦表うろくくやうおや松の奥
 沖小も風のいさむ舟玉
 茫然と暮虫のうろくはくりりて
 切火のたよにねかひる君ふ
 雲より立かつらおとも舟をさ
 無瀬とけり御田の川にわ
 泉より一巻のせきと放さぬき

神祇

雜之句

涼袋獨吟



片巻くゝん神燈を正通よ谷
此道より生剥 逆剥 山おろし
河内のうそと誓文より
あ方々もさきうさきうさ何ら
故ら蒼木よりさきいづれ
螢火のかりやく神の月暗し
生きくゝんを洗米と囀
城あやの法守より田畠ちりちり

太鼓の湿ふ敷ねより
咲花より日侍の望む月と露し

二

増子さきさきくゝんかあ忌
遙拜も叶はぬ恋よりさき
出雲へ志のふゆの物あ
は遠くく 研庵のやまこゝろ
舟馬ぬき免らさきさきの先陣
御火焼のくらくらふ村より

祝詞の疾の葉かすか
 祝ふもよりののよめやうくと
 泣く細なく涙は毎毎
 費く来く憂ひさしいし涙の香
 蹴上る鞠の忌牛とくも
 片とよも割屑く雪三々如月
 絵るうらぬけく霧の乱る
 狐宮のむきりかきことひさち帯

ニウ

赤社へ釈む傾城たる釈
 浮橋のまへも月しい夕暮り
 名れとく免る藤戎の来
 玉垣の花のまを水橋廻して
 幣小も襟はあつたまゝあふ



釋教

雜之白

雲深——坐禪子並小山於取

仏法僧徒如くあけい

弓——と礼子如てハ何く

矣名く空存とる物ナリ

あへ吹く風もる月もあ

木の子よ草く伐杭のあ

忍く草を喰く言礼子嘆

ウ

己幸と和如連る気あし
 傘の隈も衛貫女危し
 更しく十ねの澄る威法
 安ふ少くはあやも欲ふ成り
 投るも通る舟の揺待
 澄るふ足はさる言は月
 望るる嵐とかりふ春をれ
 貴い乳の餓鬼とあはる家

ニウ

誇るるねる東に六色
 己不生不異よそ何もをり
 宵中の揺る気悩の傍
 本後く花の習断り枝とせ
 實地へはるふ喜は耕



無常 雜之句

鼻ふさく桐なうらもわらうたりの
 日陰も苔の下よりの春
 花枯木いつまじりそなたあつらん
 あやを忘るは虫ふと博しき
 立酒も次々あられは月定一
 その花をさうらぬ飯の道後
 依却庵の筈りやうま今家まうく

ウ

①
あつふ妻あ戸を逃霊く押さ
果んすや勝くハ骨も拾ふや
何この木枯ふ塚おお淡
名子あひく増の林と目出さうり
笑へくや侍く——ぬ
玉の流の切もくそ慕す意の月
の十九院のたぬ娘捨鈴
るさ——とくまら死虫のしをそ

物もさうねむいぢ
旅ら何カリモカリ——
波尾子投す身おもぢ
と習くあそふおもぢ

二
神う——接ふみのたまか
あの奴も死ニ光く月を背く
きくもふくくうせる新田の灰
下房めをさきく案ふつら川

ちんくね ね 寂ふあは ね 尋れ
 世ら 暮る 藤の中より くれこめく
 換る ばとく かく力 痛也
 可ふ 心く ちる 緋堂子 ね 分 自
 言 吹く こと くれ 尾 不 小 也
 あく ね こと ぼく 雨の 板 火 了
 取 殺 しく とも 恋ハ 叶 け ぬ
 此 神 とい の 道 くら る ち の 小 花 まで

ニウ

あは せ とも ね の 上 子 公 を 垢
 車 あり ぬん こと 子 案 路 の 枕 ぬ
 急 ち ぬ ぬ ち 門 火 くる も 千 也
 ち しく ぬ ち の 辞 世ハ 風 の お と
 ち しく の 息 ち 川 しく ぬ ぬ



十

望海軒

子良

夏う風雅の節とあふる

神風もかううううわく梅の花

あまのめりた佛とて正

気のつちふふふふやとけいけい定は梅

定は子良の骨髄は拾

白うあまの心の舍利わむはの目

續と匹猿の集り中の一勾の立紙撰入をふふ
廣く春門の凡化とつゝ一勾一味の事なる
神々しく二勾の醍醐の古を唱へて一七
いふるゝるに二十章とあるはさつゝむふ時ち
難くもなりふと先決の古段とあわす人老染め
飯と口よりつゝ初学の應を補入し是れは
ふゝ底の事とあつゝ我徒の命を失ふ人
佛の牛もいふれりや養主の身とあつれは

一勾の立

五尾撰

既のやいな夏の夜ひもの
湖をぬまゝとてふまぢり葉

大松ら諸もあつゝ民老ふ者
能くまゝとて神とてく言の根

井の雀めさりゝ火子に相ふ
雪の根はあまこととてく言の骨

喜りぬハ尾の低く事なる内
言ひ骨の又一系本骨

ふみきくく風もあ〜
根神あまの浦のよ〜

井極の音を何そ〜
ちふきく〜

いふ〜
煉掃の埃〜

海〜
空吹き〜

烏帽子〜
蓋

細の足〜
くん〜

枕さく門〜
夏堂の剝屑〜

村中〜
瓦〜

傳ふくく之日あへんふふ日書
寺の足も首代へむく

滝も尺時くも音ありの際
氣切も面ふとふよ入るは

芝あうく右鼓のそいもあ
花んと寸もくくははの

脱くせはりあ肩下はあ
拾ひ子と拾へくくはあ

道者此は榮り同くはあ
古寺と替の流くく掃く又ふ

六波女下は役ハ都も山み流し
子もあふりもあふ給帽子

あうくくく十自まは
お名りの口とちくかこやり

草葉草あうら石は軒
拾ひ子と云くすはあはあ

聖王座く通るハ狗く書て通
猶如抄さ人ふ独寐のねん

目高よりくこく石葛れあ
建りのと押へく捲く涼しう

くし海の中へ下うけりり
美及と大カありく皆員ふ

夕日の糸ふ椽子椽 鈴
佛檀く熟杖子く運子合

古新ら子ももの口よけく
刷毛と虫ハくく這入子佛檀

揚枝くく人も虫く
舟若の別まハ雲もくこく

ハッうハタ日たりねふ
母れき子と牛くく

小倉とあく吹送れ
佛檀子信事れみく

お中一の幕より余おつて月
仮櫓なる是と果やうく居る

木の芽もこのひく星と月
数哉より呼ばるるに地をく

聖まき又男のそよぐ鳥依を
殿前よりぬ日る流花の海

昔あつち源を根をさすはさく
さる故をのまはし伝禮とる月

解く未分るよ知とそりて
花川より去るまじくふる花

方々穂つとをあゝるをめ
うつむるく有はるる吹流

羽織志の月く梅雨を定ふ
橋の原をたまりく這入るも有

回金の時流つまゝくさき
流花一賞よるのまはるる花

馬糸のあはれをうりの男も
ほろひんは子 蓮花の候

飛くよ元山やうしや本立
就ちよからうしや辰不拾子

唐津焼おもしろい宵申して
宵一ぬけうしや本立松原

袴足ぬ録もあはれかこまり
なくろうしや益し一まゝ拾子

ちねしうしやのけしうしやあはれ
汁あの下張しうしや思ひ切

操ようしやあはれあはれ
さうしやあはれあはれあはれ

あはれのあはれあはれあはれ
虫のおふやとつうしやあはれ

さうしやあはれあはれあはれ
かうしやあはれあはれあはれ

戸と志免のついでの中との悉然
砂持子 碓氷の珠の頂より

又虫一 沼子みと川こく
春名の目子急塚のまことこい

なつたそおり人 此年為
大野の初々橋平りあり

春の山とんこの歌も目山とあそ
飛御も一里 飛くねき若

去 宮を藪をくまの旭うち
偏うちあそく 貧僧の御

梅 穂もきてに 堀紙の花
親 里の春の中へ 春の春

寔曆四甲戌季五月吉旦

二七七年 昭七拾

東武日本橋通一丁目

梅村宗五郎 版

南北抄

伊勢のぼ

枯野問答

百題集

いせおと白鳥

餘真 續之足猿

社中 一勾立

無秋 穂家のやどり

全 百梅

海乃きり

李趙

全 百梅

まのりすこ

全

東武 李趙

法外く艸拾遺

電洞

涼代 連中

東武 桐原

全 林水 荳里

夢菴 友答

涼代

江都日本橋通壹丁目

梅村宗五郎

寔曆四甲戌年五月吉旦

二七七年 昭七追

宗五郎 版

叢桂堂藏版誂書目録

南北新話

前篇 上下

涼帝

ふくやれい

浮葉著 友答

伊勢のはり

武山

雙龍

涼帝 秋吟 意の百類

涼帝

枯野問答

全

百梅

海乃きり

李趙

百題集

全

百梅

ふりりすこ

全

いせあま島

東武

李趙

はなゆづり拾遺

電洞

餘貞 續之足掬

涼帝 連中

社中

一勾立

東武

桐原

秋

穂家のやうり

全

林水 菴里

江都日本橋通壹丁目

梅村宗五郎

